

モントレーにおけるカニの正しい食べ方

川口幸宏

第1話 モントレーにおけるカニの正しい食べ方

Liberty Fish Co.

アメリカ、カリフォルニア。モントレー、フィッシャーマンズワーフにある観光みやげ店その他を歩き疲れたら、この看板のお店に行きなはれ。店の脇に「ラッコが見れます」などと、正しきら抜き言葉の日本語が掲示してあるのが気に入りませんが、そのせいか、などと決して思っただけかもしれませんが、とんと日本人観光客には人気のない、魚屋さん兼、店の奥まったところは簡易食堂となっております。ヒスパニックの人々の経営する、正真正銘、オールドフィッシャーマンズワーフの歴史と伝統を背負っております。

まずは、いつ行っても席が空いており、ほとんど幸運に恵まれ、「見れます」の看板に嘘偽り無く、ラッコの自然生体をじっくりと眺めることができます。

と、前書きはこのぐらいにして、今回の滞在中も、ほぼ毎日のようにここのお世話になった。おすすめは、これは近在のどの店にもあるから味比べをしてもいいはずだがまずはその気にさせないほどのおいしさの、カニサンド（バゲット）またはエビサンドのポストン風クラムチャウダー添え、今年はさらにポテトチップスの袋がついておりました、これで計3ドル程度。おなか一杯になりますよ。

ぼくはさらに、店を閉める夕刻近くに、「カニ一匹下さい、きれいに洗って食べやすく砕いてね、持ち帰ります。」という注文をなすことにしている（毎日ではないけれど）。ことのきっかけは、宿のレストランが異常に高く、おまけに、チップなどという習慣になじめなかった初めての旅行のおり、宿の部屋で食べるために思い切って注文したことにあり、10年を経た今では、我がモントレー旅行の必須の買い出し行事となっている。

カニの値段はその日によって異なる。今回は10ドルと7ドルの日とに出会った。話は7ドルの日のこと。

例によって、**One crab, please. Ya....., Crash and clean. To go.**と超簡易ブローケン英語で申し上げますと、お店のおじさん兄さん、昨日のようにしてあげるよと、にこっと笑いま

した。＜以下、兄とあるのは、店のおじさん兄さん、私とあるのは、ぼく。＞

兄：今日の相場は安いよ、7ドルだ。

手際よくカニを処理しながら、と、その手つきを見ていていつも思うんだけど、ああ、その殻を取ったとき、殻の内側に付いているミソがおいしいんだけどなあ、ああ.... 惜しげもなく洗い流しちゃって.... との我が精神内での自己格闘とは無縁な言葉が返ってまいりました。

兄：あんた、日本人か朝鮮人か？

私：日本人さ。

兄：いつもよく来てくれるね。

私：ちゃんと覚えてくれているんだ。

兄：今年が初めて、なんだろう？

私：違うよ、今年で、もう4回目さ。来るたびにあんたの店によって、カニを食べてるよ。おいしいから。

向こうは文章が続く早口言葉、こちらは単語の組み合わせの遅口言葉。それでもきちんと対応してくれるのは、なにもこの店のこの人ばかりじゃあない、この地の人々の大方の人との出会いの経験から知ったこと。それでも、こうしたコミュニケーションを取ってかれることのありがたさは身にしみてくる。

兄：そうかい、いつもありがとうね。日本人でこの店に来るのは珍しいんだよ。

私：日本で見るとガイドブックにはあんたの店のこと、載ってないからね。

兄：そうかい。いやいやありがとう。ところで、あんた、今度はいつ来るんだい？

... そう言われても、これから先のことは考えていない最終日前日のこと。来年、イヤ再来年.... そんなことを考えている頭とは裏腹に、言葉が、

私：来週、また来るよ。

と応えてしまった。彼は意外そうな顔をしていたが、当たり前ですよ、明らかに観光客風体の日本人が、土、日を挟んで来週に来るなんて、あり得ないことですから、ね。でも、気のいい、元気なおじさん兄さん、

兄：楽しみにしているよ。それじゃ、グッドバイだ。

と、固く握手を求めてきたのでありました。訂正するのなら今のうちだぞ、と喉まで言葉が出てきているのだが、結局は、彼に、来週また来る、という思いを残したまま分かれたのであります。

.... おじさん兄ちゃんが包んでくれたカニの袋がなによりも大切なもののように思われ、せめてカニに合うパンをと求めて、街中のスーパーへと赴いたのであります。

第2話 首長と首なしの怪比

一日モンレーベイの浜辺で遊んだ午後のこと。

ここの砂浜は、砂粒の原、という形容はあたりません。砂パウダーの原というべきでしょう。浜辺を歩き回っていると、足の裏全体が柔らかく、弾力を感じるほどに、沈みます。ぼくが知っている日本の浜辺のほとんどは、足が、めり込む、という感じで、歩き回るとたいそう疲れを感じるのですが、ここモンレーベイは我が体重をほとんど感じさせない、自然な状態です。ちなみに走り回ってみましたが、実に快調でありました。

米軍基地がある関係でしょう、屈強の若者たちがジョギングを楽しむ？それとも任務？のと、ときおり行き交いますが、広大な浜辺にはほとんど人影もなく、とても観光地を思わせないので。

抜けるような青空、しかもほぼ 180 度の角度で広がっている雲一つない大空を寝ころびながら眺めていると、ふと、啄木の、初恋の一節が浮かんできます。ロマンチストである、というよりはロマンチストでありたい、と思わせる、のどかで雄大で、そして活発、静寂と自然のにぎわいがこもごもにぼくを襲ってきます。

モンレー市とその隣町のシーサイド市とを繋いでいる遊歩道を、連日、てくてく、ぶらぶらと、ア、鷺だ、ルリカケスだ、ハチドリだ、オナガだ、ホシツグミだ、このユーカリの並木トンネル、頭上 30 メートルはあるなあ、などと、2 時間余をかけて散歩を楽しんだのですが、シーサイド市の湖沼で時を過ごしていたところ、遠く鳥の一群がこちらをめがけて飛んでくるのが目に入りました。数 10 羽に及ぶでしょうか。規則正しく隊列を組んで、規則正しく円を描き、また蛇行し、また直行しをしながら飛来してきます。カモメかなあ、それともカモかなあ、それとも他の渡り鳥なのかなあと思っていると、見上げている顔の上 10 メートルほどの高さを飛び抜けていきました。そう、子どもの頃、頭上を飛び去っていくプロペラ機を追っかけた、それと同じような顔で、その鳥の一群をぼくは見つめておりました。

おいおい、ペリカンだよ！

長いくちばしをすっと前に出し、その加減か、長い首をやや上に上げているさまと、他の鳥類に比して大きい様とが、昔見た原始生物の映画に登場してくる空飛ぶ怪獣そのものでありました。以前見た時には1羽、もしくは2羽程度でしたが、今回の遭遇で、ペリカンは群を為す習性があることを知ったわけです。

その後、我が旅は、ペリカン命、となりました。モントレ市の街中にある大きな池にペリカンが羽を休めているとその姿をじっと眺めます。そう、その姿はスワンのようにもありました。水面から飛び立ちいずれかに飛行していく跡を忙しく目線で追っかけたり、と。

さて、話は代わって、ペリカンの飛行観察を存分に楽しんだあと、砂原を水際沿いに歩き始めました。うち寄せる水に足を洗われると、その冷たいこと。ラッコの生息が南限であると言われるのも、この冷たい海流のなせるせいなのですが、海水に足を洗われるのに任せながらかまわずに歩き進みます。

カモメがなにやら物体をついばんでいるのが目に留まりました。

すぐ近くに、それはもう走るような勢いで近づいていきましたから、カモメには申し訳なかったのですが、行って見てそれが哺乳動物の死骸であることが一目で分かりました。

体長が1メートル、横幅が50センチメートルほどのボアンとした固まりで、体色が白っぽいのは海水に洗われたからだと推測されます。島模様に黒っぽいのは毛皮が残っているからで、死後さほど長い時間が経過していないことを証しています。

波に洗われているので十分に確かめられず、かといって手に持って引き上げるには気持ち悪く、結局、彼もしくは彼女のまわりをぐるりと眺め回しました。手足はアザラシかオットセイ、もしくはラッコのような形状をしており、この辺りは素人の悲しさ、それらの区別さえ判然とせず、せめて頭が分かればとしばし探したが、啞然、なんとスパリと断ち切られておりました。

勇気を奮い起こして毛皮の部分に触ってみました、硬毛でとてもじゃないが毛皮商人が飛びつくほどには感じられませんが、それはまだ加工していないからかもしれない、ラッコだったら、オットセイだったら、との思いが走ります。近年保護の手が篤く、絶滅寸前だったラッコは増加傾向にあるとか、しかし、この死骸は明らかに人工的に為されたもの。

心を寂しくして、振り返り振り返り、再びカモメの餌となりつつある自然の厳しさを感じ

じながら、私の死後もまた、あのようにならぬ中に置かれたいものと、勝手な思いを寄せたのであります。

足をフィッシャーマンズ・ワーフの方に向けて進めます。人影が増えてきましたが、それとて、視界一杯に広がる砂地は人間の存在をまばらに感じさせます。

長細き黒き固まりあり、じっと見つめれば、それは生まれてはじめて自然の中で見るシャーク、すなわち鯨の死骸でありました。それはまだ死後間もないことを思わせるほどの身体はしゃんとしており、全身黒光りをしております。体長1メートルほどの小さき獐猛原始魚、失礼、あくまでも進化論的に申し上げているからでありまして、鯨にすれば、おれがいまの今生きている生物、という自己主張なさって当然のこと、なのであります。

けれども、やはり.... 首、いえ頭部がないのであります。スパリと切り落とされている形状であります。

今度は勇気を奮い起こしてしっぽを持ち上げ陸地に引っ張り上げようとしたのですが、その重いこと重いこと。その重さの中にふと感じたのは、あちらの首なしこちらの首なし、いずれも、船のスクリュウに巻き込まれ切り落とされたのではないか、ということ。なんたって、ヨットを楽しむために大きなヨットハーバーがあり、そこでラッコなど珍重生物が生息ましましておられる故、でもあり、また漁港でもあります故。

引き上げる努力をしている背後から、*Is it SHARK? Or, any kind of.....?*と尋ねらるる声があり、*Sure, Shark!*と応え申したが、その後、かの人、*Well, I'm SHARK!*とあり、まさか、彼の名はシャークさんではありますまい、そんな名乗る状況でもないのに、いったい.... といぶかっておりました。彼と別れて後英和辞典を紐解けば、「おや、驚いた。」という意味がありますのですな。うまいしゃれだなあ、と思ったときにはすでに遅いのであります。

それはともかく、ウントコシヨ、ドッコイシヨ、それでもまだまだ動きません、状態のところ、重いですか、と問い再びあります。ええ、重い、すごく重い、と返して、しっぽをうち捨てました。

ふとまわりを見ると、人垣？ができており、あどけない顔をした白人少女二人が、じつに興味深げな顔でわたしと鯨とを見ているではありませんか。ねえ、写真を撮るんだけど、鯨と一緒に入らない？と訊ねたら、にっこり。

人垣もちり始め、わたしもその地を去って振り返ってみると、先ほどの二人の少女が鯨を陸に引き上げておりました。ずるずる.....。首なし鯨はこの後、どのような運命と相

成りましょうや。

数時間後、砂浜を折り返していくと、ペリカンの群が再びモントレイ湾の上を飛び、二つの首なし生物がのったりと、相も変わらず横たわっておりました。そして一羽のシギが、わたしの後をついてくるように、よちよちちょちょこと、いつまでも波際を歩き続けているのであります。夕日が太平洋の向こうに沈もうとして、水平線はどこまでも赤く、天空の青さはますます濃さを増しておりました。